10課

12月3日

地獄の火

安息日午後	11月26日

暗唱聖句

すべてを吟味して、良いものを大事にしなさい。（1テサロニケ5：21、新共同訳）

すべてのものを識別して、良いものを守り（なさい）。（1テサロニケ5：21、口語訳）

今週の聖句

マルコ9：42～48、マラキ3：19（口語訳4：1）、ユダ7、1テモテ2：5、使徒言行録2：29、34、35、1ヨハネ5：3～12

今週のテーマ

イタリアの詩人ダンテ・アリギエーリ（1265～1321）は、彼の有名な著作『神曲』の中で、死後の魂の架空の旅について書いています。作中の魂は、地中の地獄、または煉獄（れんごく）に行きますが、そこでは人間の霊が自分で自身を清め、天国、あるいは楽園に上り、神の前に出るにふさわしい者となることができます。

これは架空の詩にすぎませんが、ダンテの言葉はキリスト教神学、特にローマ・カトリック神学に多大な影響を与えました。不死の霊魂が地獄、または煉獄、あるいは天国に行くという基本的概念はカトリック教会の基礎となっています。多くの保守的なプロテスタントの教派も、霊魂は不滅であり、死後、天国に上るか地獄に下ると信じています。もし人間の霊魂が決して死なないのなら、肉体の死後、どこかに行かねばならないことになります。このように、人間の本質を誤った理解は、恐ろしい神学的な誤りを生んだのです。

今週私たちは、聖書の示す死後についての考えとともに、このような聖書的でない理論について考えます。

日曜日　11月27日　不滅の蛆（うじ）

問1　マルコ9：42～48をイザヤ66：24と比較してください。「蛆が尽きることも……ない」（マコ9：48）という表現をどのように理解すれば良いでしょうか。

この「蛆」（the worm）（マコ9：48）という単数名詞は、死後、地獄へ行き、そこで死ぬことなく、永遠の責め苦に苦しみを受ける悪人の肉体を離脱した魂や霊を意味するものであると解釈する人たちがいます。

しかし、この解釈は聖書の無意識という死の概念を反映していません。さらに、旧約聖書の背景も無視しています。実際、「この単数形の『蛆』（the worm）は一般的には複数形の『蛆たち』（the worms）として用いられるもので、単数形の蛆を意味しない。この場合は腐敗してゆく死体に取りつく蛆たちを意味する」（ロバート・G・ブラッチャー、ユージーン・A・ニーダ『翻訳者のためのマルコによる福音書ハンドブック』304ページ、英文）。

イエスはマルコ9：48で、イザヤ66：24の「外に出る人々は、わたしに背いた者らの死体を見る。蛆は絶えず、彼らを焼く火は消えることがない。すべての肉なる者にとって彼らは憎悪の的となる」を引用しておられます。

この驚くべき比喩表現は、地上で死んだ神の敵が滅ぼされてゆく戦場の様子を描写しています。火で焼かれない死体は蛆によって分解されます。あるいは、初めに蛆によって分解され、次に火で焼かれます。いずれにせよ、〔この聖句は〕朽ちゆく肉体から魂が離れて地獄に浮遊する根拠となることは何も語っていないのです。

しかし、尽きることのない「蛆」についてはどうでしょうか。イザヤ66：24（マコ9：48に引用）の隠喩的表現は、それらの蛆たちが不滅であることを意味しません。この表現は、蛆たちはその分解の働きを途中でやめないことを強調しているのです。言い換えれば、悪人の体を朽ち果てるまで食い尽くすということです。対照的に、神の忠実な子らは、「新しい天と新しい地」に喜びにあふれて住み、御前で神を礼拝します（イザ66：22、23）。この対照的な運命を念頭に置いて、イエスが、人の体の重要な部分である手足や目を失っても神の国に入ることは、完全な体で蛆や火で滅ぼされるよりはるかに良いと言われたこと（マコ9：42～48）も不思議ではありません。

最終的に、私たちは完全に救われるか完全に滅びるかのどちらかです。その中間はありません。永遠の命か永遠の滅びのどちらかなのです。この事実は今日、あなたがする選択にどのような影響を与えるでしょうか。

月曜日　11 月 28 日　地獄の火

『地獄の光景』という題の子ども向けの小冊子の中で、ローマ・カトリック教会の司祭であったイギリス人のジョン・ファーニス（1809～1865）は、永遠の責め苦を、天と地よりも大きい巨大な鉄の玉として描いています。「数億年に一度〔原文ママ〕、一羽の鳥がやって来て、その翼から抜け落ちた1枚の羽が、その巨大な鉄の玉にほんの少し触れる」（24ページ、英文）。作者は、罪人を焼く地獄の火は、こうして鳥の羽が触れなければ、その鉄の玉が擦り減ってなくなった後も続くと言います。

悲しいことに、多くのプロテスタントが今日でさえ、失われた者たちについて、似たようなことを信じています。

問2　マラキ 3：19（口語訳 4：1）とユダ 7 を読んでください。これらの聖句はどのように、「地獄の火」という観念、あるいは、イエスが表現された、失われた者たちが入る「永遠の火」（マタ 18：8）または「地獄の消えない火」（マコ 9：43）をより正しく理解する助けとなりますか。

「永遠（の）」という言葉（ヘブライ語で「オーラム」、ギリシア語で「アイオーン、アイオーニオス」）は、前後の文脈によってさまざまな意味を持っています。例えば、神と共に用いる場合、この言葉は神の永遠性を表しますが（申33：27、「とこしえの」）、人間との関係の場合は、人間の寿命に制約されます（出21：6、「生涯」）。火を形容する場合、それは、焼くべきものを焼き尽くすまで消えない火を意味します（マタ18：8、25：41、「永遠の」）。これは、「永遠の火」が、悪人たちを完全に、そして「根も枝も残さない」（マラ3：19〔口語訳4：1〕）で焼き尽くすという意味において永遠であることを意味します。

悪人に対して永遠に続く罰という考えは重大な意味を持ちます。悪人が永遠に罰せられるのであれば、悪も永遠に消滅しないことになります。すべての人間の命が神に由来するのであれば（申32：39、詩編36：10〔口語訳36：9〕）、神は「悪人が死ぬのを喜ばない」（エゼ33：11）はずです。ではなぜ神は、悪人が終わりのない責めに苦しむために命を与え続けられるのでしょうか。もし悪人たちが「彼らの行いに応じて」（黙20：12）罰せられるのであれば、なぜ人間の生涯は短くとも終わりのない罰を受けるのでしょうか。

聖書が言及する「永遠の火」は、黙示録20章の（第13課参照）千年期後の「火と硫黄の池」に対する隠喩であると考えるべきです。このように、すでに存在し、永遠に燃え続ける地獄は聖書的な教えではないのです。

火曜日　11月29日　煉獄にいる聖徒たち

ローマ・カトリック教会は、地獄に落ちるほどではないが、まだ天国に行く準備もできていない死者は、煉獄で罪を清め、その後に天国に上ることができると考えています。彼らの煉獄での苦しみは、彼らの愛した者たちの祈りと秘跡〔カトリック教会用語：教会で執り行われるキリストの神秘を目に見える形で現在化する儀礼〕によって軽減されると言います。

『カトリック公教要理』は煉獄についてはっきりと次のように述べています。「神の恵みと友愛のうちに死んだ者で、なお完全に清められていない者すべてに、実に永遠の救いが約束されている。しかし彼らは死後に清めを経験する。そうして彼らは、天の喜びに入るに必要な神聖さに達するのである」（『カトリック公教要理』291ページ、英文）。

さらに彼らの苦しみは彼らが愛した者たちの祈りや、他者による死者のための行いによって軽減されるとも述べています。「教会はまた、施し、免償、秘跡の行為を死者のために行うよう命ずる」（同291ページ）。

問3　コヘレト9：10、エゼキエル18：20～22、ヘブライ9：27を読んでください。これらの聖句はどのように煉獄説に反論していますか。

煉獄の教理は、燃える地獄という観念や死者のために祈るという異教徒の習慣を結合させたものです。この教理は、聖書の次の教えを信ずる者たちにとっては受け入れられるものではありません。（1）死者は無意識のうちに墓の中で休んでいる（コヘ9：10）。（2）1人の堕落した人間の義は他の堕落した人間に移されることはない（エゼ18：20～22）。（3）私たちの唯一の仲保者はイエス・キリストである（1テモ2：5）。（4）死の後には最後の裁きが続き、〔その間に〕地上の人生で犯した罪を悔い改めるチャンスは二度とない（ヘブ9：27）。

さらに、深刻な影響は、聖書に反する煉獄の教えが、神のご性質をゆがめているということです。「自身の堕落以来、サタンの働きは天父を誤解させることにある。彼は霊魂不滅の教理を提唱し……、永遠に燃える地獄という考えを生み出し、煉獄を発明した。これらの教えは神のご品性を曲解させ、神は厳しく、復讐（ふくしゅう）に燃え、横暴で、決して赦さない存在であると主張する」（エレン・G・ホワイト『原稿51』、1890年、英文）。

煉獄や永遠の責め苦のような誤りは、教理の重要性を教えています。なぜ私たちが誰を信じるかだけでなく、何を信じるかが重要なのでしょうか。

水曜日　11 月 30 日　肉体から離脱した魂のいる天国

プロテスタントは煉獄を受け入れませんが、それでも多くのプロテスタント信者が、死んだ義人の魂はすでに神の御前で天国を楽しんでいると信じています。その「魂」は単なる肉体から離脱した魂だと主張する人もいれば、離脱した魂ではあるが、霊的な栄光の体に覆われていると信じている人もいます。

「生きている死者」の霊的状態がどうであれ、このような理論は、聖書の教える終わりの日の復活と死者の裁きの教理をなし崩しにするものです。義人の魂がすでに天国で楽しんでいるなら、なぜ復活と裁き（黙20：12～14）があるのでしょうか。

問4　使徒言行録 2：29、34、35 と 1 コリント 15：16～18 を読んでください。これらの聖句は、どのように死者の状態と復活を待つ人々に光を当てていますか。

聖書は、すでに天にいる者たちはエノク（創5：24）やエリヤ（王下2：9～11）のように生きたまま天に上げられたか、モーセ（ユダ9）やキリストと共によみがえった人々（マタ27：51～53）のように死から復活したと教えています。

すでに学んだように、「祭壇の下」で神に復讐を求めて叫ぶ魂（黙6：9～11）の隠喩は、単に正義を表す比喩であって、霊魂の無条件の不死を立証するものではありません。そうでなければ、どう見てもこれらの人々が永遠の報いを楽しんでいるようには思えないのです。現実には、墓は死者のための休息の場所であり、無意識のうちに意識のある存在が回復する終わりの日の復活を待っているのです。死者は、義人の場合であっても、天の周りを浮遊しながら終わりの日に肉体と一つになることを忍耐強く待っている離脱した魂ではありません。

さらに、パウロが1コリント15：18で述べていることは、もし死者が復活しなければ、「キリストを信じて眠りについた人々も滅んでしまった」ことになるということです。死んでからどれくらい経っているにせよ、もし彼らがすでに天で楽しんでいるならば、どうして滅びることがあるのでしょうか。新約聖書の鍵となり、中心的な教理であるキリスト再臨における死者の復活は、義人の魂が死んですぐに永遠の報いを受けるために肉体を離脱して浮遊するという誤った教えによって、無価値なものにさせられます。にもかかわらず、私たちはいつでも、特に葬儀のたびにこの教えを耳にするのです。

問5　1ヨハネ5：3〜12を読んでください。なぜ使徒ヨハネは、「永遠の命」を、キリストと結ばれている人だけのものに限定しているのでしょうか。

霊魂の無条件の不滅という非聖書的な教えとは対照的に、条件付きの不滅の教えは聖書的であることが、1ヨハネ5：11、12において明らかにされています。この意義深い聖句の意味を理解するためには、神のみが「唯一の不死の存在」（1テモ6：15、16）であり、唯一の「命の泉」（詩編36：10〔口語訳36：9〕、コロ1：15〜17、ヘブ1：2）であることを覚えなければなりません。

アダムとエバの堕落（創3章）によって罪がこの世に入り込んだとき、彼らとその子孫すべて（私たちを含む）は、肉体の死の呪いのもとに置かれ、永遠の命という賜物を失いました。しかし愛の神は、人類が最初から持っていた永遠の命を再び得ることができるように、人類救済の計画を実行されたのです。それはパウロが書いている通りです。「**天地創造の前に**、神はわたしたちを愛して、御自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました」（エフェ1：4、強調筆者）。

使徒パウロはこれを「一人の人〔アダム〕によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだ」のだから、「一人の人イエス・キリストを通して」永遠の命という恵みの賜物が人類すべてのものとなったと説明します（ロマ5：12〜21）。

さらに使徒ヨハネは付け加えます。「その証しとは、神が永遠の命をわたしたちに与えられたこと、そして、この命が御子の内にあるということです。御子と結ばれている人にはこの命があり、神の子と結ばれていない人にはこの命がありません」（1ヨハ5：11、12）。

イエスの御言葉の光に照らすとき、この計画の全体がさらに明らかになります。「わたしの父の御心は、子を見て信じる者が皆永遠の命を得ることであり、わたしがその人を終わりの日に復活させることだからである」（ヨハ6：40）。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる」（同11：25）。

これは、永遠の命はキリストを通して与えられる神の賜物であり、それは現時点では約束されており、終わりの日の義人の復活の後にのみ完全に実現することを意味します。結論は非常に単純です。すなわち、永遠の命がキリストと結ばれた者のみに与えられるとすれば、キリストと結ばれていない者には与えられない（1ヨハ5：11、12）ということです。対照的に、霊魂の無条件の不死説は、天国であれ、地獄であれ、すべての人間に、キリストと結ばれていない者にも永遠の命を与えるものです。この教えは一般的ですが聖書的ではありません。

金曜日　12月2日　さらなる研究

参考資料として、『各時代の大争闘』第33章「人は死んだらどうなるか」、第34章「心霊術の正体」を読んでください。

「死者に意識があるという教理は、霊魂不滅という根本的な誤りに基づくものである。そしてこの教理は、永遠の責め苦という教えと同様、聖書の教えに反するものであり、理性の命じるところにも、人間の慈悲の心にも、相反するものである。一般に信じられているところによれば、贖(あがな)われて天にいる者たちは、地上で起きるすべてのことを、そして特に、彼らがあとに残してきた友人たちの生活を、よく知っているというのである。しかし、死者が、生きている人々の悩みを知り、自分の愛する者たちの罪を目撃し、彼らが人生のあらゆる悲哀、失望、苦悩に耐えるのを見ることが、どうして幸福の源となり得ようか。地上の友人たちの上をさまよう者に、天国の喜びがどれだけ味わえようか。

また、息が絶えるとすぐに、悔い改めなかった者の体と魂は地獄の炎の中に投げ込まれるという信条は、なんと嫌悪すべきものであろうか。自分たちの友人が、不用意のまま墓にくだり、永遠の苦悩に陥るのを見る人々は、どんなに激しい苦しみを味わうことであろうか」(『希望への光』1863ページ、『各時代の大争闘』下巻296ページ、一部改訳)。

話し合いのための質問

❶ **死者の状態と地獄の在り方についてクリスチャンと話をした人々が、彼らが実に頑なに、救われた者がすぐに天に行くことだけでなく、失われた者が地獄で永遠に苦しむことさえ信じているのに驚きました。その考えられる理由の一つは、愛する者たちが、死んですぐに「主と共に」いると信じたいからです。しかしなぜ、失われた者たちが地獄で永遠に苦しむという恐ろしい考えにも固執するのでしょうか。この事実が教えていることは、「言い伝え」の力がいかに強いかです。クラスで話し合ってみましょう。**

❷ **ほとんどのキリスト教派が、霊魂の無条件の不死とそれに伴うすべての理論を信じています。死と死後の状態について聖書的視点を持つ教会として、私たちは何をすべきでしょうか。(また何をすでにしているでしょうか。)**

❸ **ダンテの詩、『神曲』は架空の話ですが、死後の「魂」の在り方について誤った教えを人びとの心に植えつけるために大きな影響力となりました。キリスト教神学がいとも簡単に外部の教えに影響されてしまう事実から何を学ぶことができますか。他に一般的な概念がクリスチャンの神学に影響を与えているものがありますか。どうすればそれを防ぐことができるでしょうか。**

「モデスティ！　モデスティ！　モデスティ！」

ナミビアのカティマ・ムリロの病院にいる2歳のアクリオウスは、何か月も病気でした。多くの人が彼を見舞い、だれもが彼のひどい苦痛を見て、涙しました。「病院は役に立たない」と、ある人はアクリオウスの両親に言いました。別の人は、「呪術師に相談すべきだ」「神様は理解してくださる」「やってみるべきだ」と言いました。

最後の訪問者が帰ったあと、父親は母親に向かって、「どうしようか」と尋ねました。「あの人たちの言っていることは正しいかもしれないわ……」。母親は一人息子が苦しんでいるのを見るに忍びず、呪術師に相談することに同意しました。

呪術師は、「魔女が悪い魔力をかけたのだ。伝統的な薬を飲めば回復する」と言い、両親は呪術師の薬を買って毎日子どもに与えました。しかし、与えれば与えるほど容態は悪くなり、父親は熱心に祈り始めました。「主なるイエス様、私は間違いを犯しました。私はあなたの救いの恵みから離れてしまいました。主よ、私にみ言葉をください。あなたは重い皮膚病の人を癒やし、目の不自由な人を見えるように、足の不自由な人を歩けるようになさいました。息子にも同じことをしてください」

それからしばらくして、父親は夢を見ました。その中で彼の名前を呼ぶ声が聞こえました。「モデスティ！　モデスティ！　モデスティ！　これは私の子だ。なぜ悪霊でこの子を汚したのか。彼を生かしたいなら、呪術師に関わってはいけない」

父親は震え、起き上がり、伝統的な薬を捨てました。彼は、アドベンチストの医師がキャンプミーティングで健康について講演していたことを思い出し、息子をその医師のところへ連れて行きました。その医師は、アクリオウスが肺炎と結核にかかっていると診断し、治療できる病院に送ってくれました。両親は祈り続け、イエス様を完全に信頼しました。アクリオウス（写真）は現在22歳です。

アクリオウスの両親、モデスティとレベッカ・カクラには4人の子どもがいます。子どもが生まれるたびに、町の人々が受ける伝統的な儀式を受けることを拒否し、その代わりに、彼らは赤ちゃんたちをイエス様にささげるため、教会に連れて行きました。

イエス様を受け入れながらも、伝統を完全に捨てきれずに葛藤している人々のために祈ってください。彼らは、聖書の教えを受け入れますが、現実の課題に直面すると伝統に戻ってしまうのです。そういった人々を助ける宣教師の働きのために、あなたの13回献金は用いられます。（オクルチェイン・マテング）